

氏名	富島 大樹			
学位の種類	博士 (カウンセリング科学)			
学位記番号	博甲第	9512	号	
学位授与年月	令和2年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	大学生の心配の制御困難性に対する注意バイアスの影響			
主査	藤生 英行	生涯発達科学専攻	教授	
副査	大川 一郎	生涯発達科学専攻	教授	
副査	大塚 泰正	生涯発達科学専攻	准教授	
副査	田上 不二夫	東京福祉大学	教授	

論文の内容の要旨

富島大樹氏は、本博士論文により、「不安」の思考成分である心配に焦点をあて、その心配の内容に注意が偏る情報処理が及ぼす影響を実証した。また今後の課題が残されるが、携帯可能な、情報端末による修正プログラムを開発し、その効果を検討した。

(目的) 著者は、心配は将来起こりうる問題の解決に役立つ一方で、制御困難になりメンタルヘルスの悪化をもたらすという相反する二側面を持つ点に焦点を当てている。著者は、本論文では、大学生の心配が制御困難になる過程の中で、注意バイアスという心配関連の情報に注意が偏る情報処理が及ぼす影響を実証することを目的とした。

(対象と方法) 著者は、大学時代は多くの者にとって学生から社会人へと社会的立場が変わる最後の時期で将来の職業や人生について心配が多い時期と捉え、大学生を研究対象としている。著者は、各研究 25 名から 120 名を調査協力者とし、各研究 22 名から 31 名を実験協力者とした研究を実施している。研究 1 では質的検討を行い、大学生の心配の内容、コントロール方略、心配が制御困難になる要因について検討した。著者は、研究 2 から 4 までで、心配に関連した注意バイアスの測定方法を開発した。そして、研究 5 では、心配に関連した注意バイアスを修正する自助的なツールを開発しその効果を検討した。

(結果) 著者は、第 5 章(研究 1)で大学生の心配の内容を分類し 12 種類であることを実証した(分析 1)。その心配に対するコントロール方略は 11 種類であることを見出した(分析 2)。そして、著者は心配のコントロールを阻害する要因は注意の要因、感情の要因、態度の要因、環境の要因の 4 つであることを示した。その中でも注意の要因の記述数が心配傾向高群に顕著に多く見られ、心配における注意バイアスの影響である知見を得た(分析 3)。

著者は、第 6 章(研究 2~4)で、心配に関連する注意バイアスの測定方法を開発した。まず、先行研究のメタ分析を実施し、最適な課題として修正視覚探索課題、刺激として言語刺激、刺激の内容は心配語の有用性が高いことを示した。研究 3 では研究 1 のデータを援用し心配語のリストを作成した。著者は、研究 4 で、研究 3 の心配語のリストを用いた修正視覚探索課題を開発した。そして、著者は心配傾向の高い者は、心配語に対してより早く反応する「注意の促進のバイアス」と、心配語から意識を追い払いにくい「注意の解放困難のバイアス」の 2 つが顕著であることを示した。著者は、第 7 章の研究 5 では携帯端末を用いた注意バイアスを修正する自助的な方法の効果を検討した。著者は分析 1 では心配傾向

の高い者を対象に、実験群には注意バイアス修正法、比較群には注意コントロール訓練を行った。その結果、実験群と比較群ともに改善が見られ、実験群と比較群における効果に有意な差が見られなかった。ベースライン段階において心配傾向は高いものの注意バイアス得点が低い参加者が含まれたことがその要因と考えられた。著者は、さらに分析 2 で、心配傾向の中程度以下の者を対象に、心配の制御困難性の増悪に対する予防的効果を検討したが、期待された効果は見出せなかった。それは、本研究で設定した注意バイアスの修正に有効なトレーニング回数が少なく、特定のストレスに絞らなかったことが要因として挙げられた。

(考察)著者は、本論文によって、国内の大学生でも、心配の制御困難性に注意バイアスが影響していることが実証された。また、大学生の心配に関連する注意バイアスを測定する修正視覚探索課題を開発し、「注意の促進のバイアス」と「注意の解放困難のバイアス」を検出した。加えて注意バイアスの修正に、携帯端末を用いた自助的なツールを開発し、心配傾向が高い者に対して一定の効果を見出した。著者は、本論文の成果を踏まえて、大学生のメンタルヘルスの改善において実施可能なものとして、本研究で開発した注意バイアスを測定する修正視覚探索課題を心配の制御困難性の増悪のリスクを判断することに役立てられる可能性があることを提起した。加えて、携帯端末を用いた心配に関連する注意バイアスを修正する自助的アプリを開発した。

審査の結果の要旨

(批評)

富島大樹氏は、研究協力者を大学生に焦点を絞り、心配のメカニズムとその制御について研究を行った。心配は、将来起こりうる問題の解決に役立つ一方で、制御困難になりメンタルヘルスの悪化をもたらすという相反する二側面を持つ点がある。特に後者の心配が制御困難になる過程の中で、注意バイアスという心配関連の情報に注意が偏る情報処理が及ぼす影響を実証することを、器具の開発を含む 5 つの研究で明らかにした点は評価できる。プログラミング言語を用いて、大学生にとって常に身の回りにある携帯端末を用いて実施できるアプリを開発し、注意バイアスを修正する自助的ツールとして用いられる可能性を 2 分析で実証した。これは他に類を見ない独自の視点を有しており高く評価できる。

2020 年 1 月 24 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（カウンセリング科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。